

平成26年12月27日(土)

老球の細道95号

「驚きの眉」

会津バスケットボール協会理事長 室井 富仁

驚いたときの顔の表情は、あらゆる文化に共通している。『表情分析入門・・・表情に隠された意味をさぐる』（誠信書房）のなかで、驚いたときに特有の表情を「驚きの眉」という造語で言い表している。

「眉毛が弧を描いてつりあがることにより、眉の下の皮膚が引っ張られて普段より露わになる」

眉毛がつり上がると目が大きく見開かれ、視野が広がる。驚きの眉は、体が人間にもっとしっかり見るよう強いる手段なのだ。また、驚いて見直すことにより、自分の見たものを確かめることもできる。反対に、怒ると目が細くなり、既にわかっている問題だけに意識を集中できる。驚くと眉が上がるだけではなく、下あごが落ちて口が開き、一瞬、言葉を失う。体は一時的に動きを止め、筋肉が弛緩する。まるで、しゃべったり動いたりせず、しっかり情報を取り込みなさいと体が求めているようだ。

つまり驚きには、予想外のものと直面し、推測機械が機能しなかった場合の一瞬の緊急停止命令の役割がある。すべてが停止し、活動が中断されれば、自分を驚かせた出来事にいやでも注目するという。

・・・『アイデアのちから』（日経BP(社)より・・・

2010年トルコ、2014年スペインで開催された男子バスケットボール世界選手権大会（ワールドカップ）は大方の予想を裏切ってアメリカの圧勝に終わった。トルコ大会の決勝はトルコ国民にとっては人生至福のカード、トルコ対アメリカ。スペイン大会はスペインの優勝が夢幻の如くセルビア対アメリカ。興味はゲームの始まりだけで、後はバスケットボール発祥の地アメリカの凄まじい強さに驚きの眉を表現するしか術はなかった。

私の眉は生まれつき驚きの眉（魔娘と鬼嫁に馬鹿にされている）で、どんなことにも驚きながら苦節60年の人生を送ってきた。長男のように眉にそり込みを入れたりしていれば、あまり驚かずに平穏な人生を送れたかもしれない。それにしても、最近のアメリカバスケットボールは私の眉をさらに驚かせ、ツバをつけながら観戦しなければならないほどの進化している。

かつてアメリカのバスケットボールはパワーバスケットが主流で、ゴール下でダンクやインサイドゴリゴリで世界に君臨していた。ところが、ここ10数年来ヨーロッパの高さに対応できなくなり、アウトサイドシュートの下手くそさも手伝って世界の王座に君臨できなくなった。アメリカと対戦するチームはゾーンディフェンスを使えば勝てるようになったからである。アテネオリンピックしかり、日本での世界選手権しかり。

しかし、今2大会は恐るべしアメリカ。やはり、バスケットボール発祥の地。進化しないではいられなかった。負けることに対するプライドが許さなかった。若手中心のNBA・Bチーム選抜といったチーム編成にもかかわらず、ディフェンスをがんばり、リバウンドにとびつき、よく走る。ウイークポイントであったアウトサイドシュートは今大会NO1の変容ぶり。NBAの選手でありながら学生バスケットボールのような一途さが心を打つ。

スターなどいなくても勝てる。謙虚に一生懸命プレーする。アメリカもそうなのである。